

ウェルビーイングの実現を支援する生涯学習の在り方について

—デジタル社会への対応に着目して—

生涯学習支援課 栗飯原俊輔

要 旨

一人一人のウェルビーイングの実現をめざし、生涯にわたって学び続ける教育環境づくりが求められる中、徳島県立総合大学校主催「新未来とくしま講座」について、講師・テーマ、受講者の状況、アンケート結果等により、現状を分析し、今後の方向性について考察した。今後も、徳島の文化・自然・暮らし等をテーマとした講座を実施していくことが社会の要請に合致していると考えられたが、継続的受講者層の高齢化、新規受講者の減少という課題も見られ、オンライン参加の拡充等、デジタル社会への対応を進めることで、課題解決の一助とできる可能性がうかがえた。

キーワード：生涯学習、ウェルビーイング、デジタル社会、オンライン配信

I はじめに

人生100年時代という言葉が、広く人々に知られるようになった。しかし、その人生をどう生きるかという共通の道しるべとなるものを見だしにくく、むしろ、自らの人生を自らがどのように描くかということが求められている。第4期教育振興基本計画では、マルチステージの人生を生涯にわたって学び続ける学習者の育成の中で、「人生100年時代は、同一年齢での単線的な学びや進路選択を前提とした人生のモデルから、一人一人の学ぶ時期や進路が複線化する人生のマルチステージモデルへと転換することが予測されている」と述べている。生涯学習は、一人一人が豊かな人生を送ることができるよう、個人の自発的意思に基づいて行うことを基本として、生涯を通じて行うものである。教養を高め、多様な人々と出会い、自己実現を図るための学習は、長寿化が進展する人生100年時代において、重要な意義を有するものである。

しかしながら、所得水準の向上や自由時間の増大、高齢化の進行や生きがいづくりといった高度経済成長後の日本社会におけるニーズに基づく生涯学習の在り方と、現在の社会的要請に基づく生涯学習の在り方を比較すると、その様相は変化している。

生涯学習は基本的には、自己実現を図る学びとして重要であるが、それに加え、人口減少や高齢化をはじめとする社会課題の顕在化の中で、他者との学び合い・教え合いによる、より豊かな学びへの変化が求められている。このことについて、重要なキーワードとして、近年注目されているのが「ウェルビーイング」である。

ウェルビーイングとは、古くは世界保健機関（WHO）憲章（1948）の中に、「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態」とある。ここでは、第4期教育振興基本計画にある「身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念」であり、「多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じるとともに、

個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念」とする。

同計画では「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」として、自己肯定感や自己実現などの獲得的な要素と、人とのつながりや利他性、社会貢献意識などの協調的な要素を調和的・一体的に育み、日本社会に根差した「調和と協調」に基づくウェルビーイングを、教育を通じて向上させていくことの重要性について述べている（図1）。

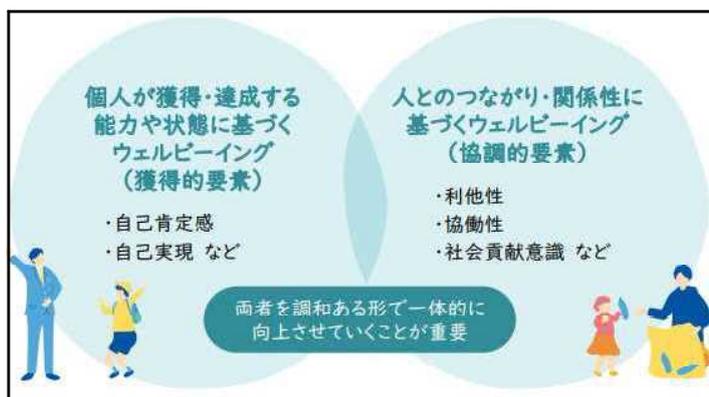


図1 「調和と協調」に基づくウェルビーイングの重要性

そして、「生涯学習・社会教育を通じて、地域コミュニティを基盤としてウェルビーイングを実現していく視点も大切である。（中略）地域における社会教育を通じて、地域のつながりの中で体験的に学び、地域における様々な活動に積極的・主体的に関わる意識を高め、それを生涯にわたって実践していくことが望ましい。」とあり、「日本社会に根差したウェルビーイング」の向上において、生涯学習が重要であるという認識が示されている。

このように、現在の社会的要請に基づく生涯学習の在り方とは、ウェルビーイングを生涯学習の観点から捉え直し、自己の学びと他者との学び合いについて、調和的・一体的に取り組むことで、学校や地域、ひいては社会の創り手を育成することであるといえる。

第12期中央教育審議会生涯学習分科会において、「デジタル社会への対応」の中で、「デジタル技術が急速に発展する中、デジタルは現代の社会課題を解決する鍵であり、新たな価値を生み出す源泉となっている。（中略）国民全体の総合的なデジタルリテラシー向上のための取組を充実するとともに、全ての世代のデジタルデバイド（情報格差）の解消を図っていかなければならない。」と述べられている。当然ながら、先に述べたウェルビーイングの向上においても、デジタル技術の活用が非常に有用であることについては、多くの人の共通認識となっている。

コロナ禍により、生涯学習における学びの機会が制約を受け、社会的不安が高まる中で、心身の健康への注目の高まりといった学びの内容や、オンライン化の加速をはじめとした学びの手法について模索されることとなった。「新未来とくしま講座」においても同様で、会場における感染症対策、入場制限、サテライト会場の設置などの取組を行いながら、今後の講座の方向性について模索を余儀なくされた。しかしながら、本講座においては、従来より、その内容は、個人の獲得的内容だけでなく、地域活性化、社会貢献といった調和的な内容を多く含んだものとなっており、それらの資産を生かしつつ継続性を重視し、その上で、デジタル化への対応を重視した運営を行うことが妥当であると考えられた。本稿では、ウェルビーイングの視点から、改めて、徳島県立総合大学校事業の中核ともいえる「新未来とくしま講座」の現状と課題について確認したい。

II 研究仮説

徳島県立総合大学校事業である「新未来とくしま講座」における取組を、ウェルビーイングの実現とデジタル社会への対応に着目して検証することによって、これからの社会で求められる県民の学びを支援するための知見が得られるであろう。

Ⅲ 研究の実際

1 新未来とくしま講座について

平成20年6月に、徳島県立総合大学校は開校した。以降、県民のニーズに対応した学習機会の提供に努め、本県の発展を担う人材を創造するとともに、政策支援機能の充実を図ってきた。開校時より「誰もが、いつでも、気軽に、参加できます」のキャッチフレーズのもと事務局が主催してきた講座のひとつに「オンリーワンとくしま学講座」があった。これを発展させる形で令和元年度より「新未来とくしま講座」が発足した。その目的は、「徳島の文化・自然・くらし等に関する地域に密着した学習を通して、『ふるさと徳島』のすばらしさや新たな魅力を発見することである。広く県民を対象とした講座であり、これまで、徳島に関連するテーマや徳島にゆかりのある講師を招いて講座を実施してきた。

講座の実施に当たっては、次のような方針で講師・テーマの選定を行ってきた。

- (1) 本県が進める政策の基本的な方向を取りまとめた総合計画である『『未知への挑戦』とくしま行動計画～徳島版『SDGs（持続可能な開発目標）』の実装に向けて～』にある「行動計画（5つのターゲット）」に講座テーマを位置付け、県の施策の一環として実施する。
- (2) 「自然」「文化」「くらし」の3分野について、バランス良く講座を設定する。
- (3) 受講者アンケートにおいて、希望を募り、その回答を加味する。

2 令和3年度から令和6年度前期までの実施状況

各年度における新未来とくしま講座の講座数は、令和3年度11講座、令和4年度11講座、令和5年度12講座を開催した。令和6年度は10講座を予定している。以下、年度ごとにテーマ及び講師を示し、概観したうえで、特色ある講座を紹介する。

(1) 令和3年度の新未来とくしま講座の実施状況について

令和3年度は、東京オリンピック・パラリンピックが開催された年である。また、新型コロナウイルスの変異株も相次いで登場しており、感染の拡大状況を見ながら社会活動が行われていた時期であり、新未来とくしま講座についても、感染対策を十分に行いながら、実施していた状況であった。新未来とくしま講座のテーマ及び講師等を概観すると、持続可能な開発目標（SDGs）が広く知られるようになった時代の潮流と県の施策が合致する中、演題や講師に関連した報道が各種メディアで取り上げられ、話題性が高かったことが、多くの受講者を呼び込む結果へつながったと言える（表1）。

令和3年度の特色ある講座として、次の2講座を挙げる。

1 講座めは、5月29日実施の「地域消滅とたたかう～日本一の妖怪伝説の村～」である。地元住民が中心となって地域に語り継がれている伝承を掘り起こし、全国まれにみる妖怪伝説の里として地域活性化に取り組んでいる内容の講座であった。行動計画の重点項目との関連では、「1. 未来へ雄飛！『笑顔とくしま・県民活躍』の実装①移住交流拡大！深化する地方創生」に位置付けている。

2 講座めは、6月20日実施の「DMV『世界初』本格的営業運行に向けて～DMVは地域活性化の切り札になれるか～」である。県南部の地域活性化の目玉のひとつとして、世界初の鉄道と道路の両方の走行が可能である公共交通の価値と存在意義についての講座であった。行動計画の重点項目との関連では「5. 未来へ継承！『循環とくしま・持続社会』の実装⑤近未来とくしま！『東京オリパラ』から『大阪・関西万博』へ」に位置付けている。

表1 令和3年度「新未来とくしま講座」テーマおよび講師

実施日	講座テーマ	講師	人数
5/29	地域消滅とたたかう ～日本一の妖怪伝説の村～	下岡昭一（四国の秘境 山城・大歩危妖怪村 村 会議員）	96 (8)
6/6	スタチの隠れた機能（チカラ）を引き出そう ～スタチ果皮ポリフェノール（スタチチン）の 機能性～	新居佳孝（徳島県立工業技術センター 課長[食 品・応用生物担当]）	99
6/20	DMV「世界初」本格的営業運行に向けて ～DMVは地域活性化の切り札になれるか～	井原豊喜（阿佐海岸鉄道株式会社 代表取締役専 務）	100 (9)
7/17	コオロギが地球を救う！ ～新食品資源としての循環型食用コオロギタン パク開発の現状と応用～	西郷琢也（株式会社グリラス Product & Sales Director）	116 (10)
8/1	南海地震は、津波被害だけではない ～阪神淡路大震災を教訓として～	西村明儒（徳島大学大学院 医歯薬学研究部法医 学分野 教授）	90
9/5	日本語の方言探訪 ～阿波弁を中心に～	峪口有香子（四国大学地域教育・連携センター 講師）	令和4年度 前期に延期
10/17	地球温暖化と徳島県の気候変動 ～気象災害から身を守るには～	下田博道（徳島地方気象台 観測予報管理官）	83 (9)
11/7	いつまでも輝く笑顔のために ～これってオーラルフレイル？って思ったら～	東山祐陽（医療法人東山歯科医院 理事長）	98
11/27	徳島発のIT企業が、日本のタクシー業界を変 える？！ ～タクシー業界の現状と未来について～	近藤洋祐（株式会社電脳交通 CEO）	64
12/12	アジア初、誰でも参加できる生涯スポーツの祭 典が徳島で開催！ ～ワールドマスターズゲームズ2021関西～	益田英栄（徳島県未来創生文化部スポーツ振興課 スポーツツーリズム推進室長）	63 (7)
12/19	生態系の保全について考える ～黒沢湿原の希少植物を紹介～	木下覚（徳島県植物誌研究会 会長）	93 (5)
1/10	こども食堂とは ～地域みんなの居場所～	佐伯雅子（NPO法人徳島こども食堂ネットワー ク 理事長）	74 (8)

() はサテライトの人数 (内数)

(2) 令和4年度の新未来とくしま講座の実施状況について

令和4年度は、Withコロナの状況に社会が徐々に適応してきた時期と言える。新未来とくしま講座についても令和3年度に引き続きサテライト会場を11講座のうち6講座で開設した。新未来とくしま講座のテーマおよび講師等を概観すると、幅広い年代に対応したり、世代間の関わりに着目した講座を実施したりして、行動計画を具体化する中で、地元徳島に密着した内容や環境・防災といった持続可能な社会実現に向けた内容など、コロナ禍を経て人々の目線がより身近なところにある状況を反映したものとなった(表2)。

令和4年度の特徴ある講座としては、次の2講座を挙げる。

1 講座めは、11月26日実施の『徳島木のおもちゃ美術館』の魅力～多世代が楽しめる体験型木のおもちゃ美術館の木育(もくいく)の取り組み～である。徳島の美しい自然、木の魅力、伝統、文化を知ることができる体験型の多世代交流の場と木の良さや温もりを伝える「木育」についての講座であった。行動計画の重点項目との関連では、「4. 未来へ発信! 『躍動とくしま・感動宝島』の実装①世界に誇る! 『あわ文化』の創造と継承」に位置付けている。

2 講座めは、12月11日実施の「みんな防災スイッチON!!!～自分と大切な人の命を守るため、いまできること～」である。子育て世代に対する災害への備えの重要性を発信するために活動している徳島県内で防災士の資格を有する母親の会の代表の講座であった。行動計画の重点項目との関連では「2. 未来へ加速! 『強靱とくしま・安全安心』の実装①未知なる災害を迎え撃つ! 『事前復興』の推進」に位置付けている。

表2 令和4年度「新未来とくしま講座」テーマおよび講師

実施日	講座テーマ	講師	人数
6/26	日本語の方言探訪 ～阿波弁を中心に～	峪口有香子（四国大学地域教育・連携センター 講師）	106
7/17	67歳からの起業 ～「勇気」「元気」「根気」で生涯現役～	東野宏一（東野リキュール製造場 店主）	80 (8)
7/24	あなたは大丈夫？知っておこう！消費者問題 ～最近の消費者トラブルについて～	阿部洋子（消費生活専門相談員）	66
8/6	支え合いの子育て ～地域で子育て始めませんか～	港満海（公益財団法人徳島県勤労者福祉ネットワ ーク 事務局次長、板野東部ファミリー・サポ ート・センター 所長）	48 (2)
8/20	大人の社会塾「とくしま上板熱中小学校」 ～もう一度7歳の目で世界をテーマに取り組む 地方創生プロジェクト～	瀬部昌秀（一般社団法人ジャパンプルー 理事長）	73 (1)
9/4	木偶王国とくしま ～阿波木偶をつくる～	吉田尚行（阿波木偶作家協会 副会長）	後期に 延期
10/15	木偶王国とくしま ～阿波木偶をつくる～	吉田尚行（阿波木偶作家協会 副会長）	70
10/22	骨粗しょう症の予防と改善 ～体を支え、動かす役割を持つ骨について～	村上亜弥子（四国大学生生活科学部健康栄養学科 講師）	74
11/26	「徳島木のおもちゃ美術館」の魅力 ～多世代が楽しめる体験型木のおもちゃ美術館 の木育（もくいく）の取り組み～	松崎美穂子（徳島木のおもちゃ美術館 館長）	74
12/11	みんな防災スイッチON!!! ～自分と大切な人の命を守るため、いまできる こと～	瀬戸恵深（徳島ママ防災士の会Switch 代表）	89 (2)
12/17	海岸清掃から見る持続可能な社会 ～レジ袋有料化の効果は！？～	黒川剛史（うずしおクリーンアップ主催者・とく しまSATOUMIリーダー、漂着物学会 会員）	71 (2)
1/7	万国博覧会史に映る世界と日本	佐野真由子（京都大学大学院教育学研究科 教授）	76 (1)

() はサテライトの人数（内数）

(3) 令和5年度の新未来とくしま講座の実施状況について

令和5年度は、5月に、新型コロナウイルス感染症の法的な位置付けが5類感染症となり、感染対策について政府が一律な対応を求めることはなくなった。一方で、当センターエントランス及びホールの大規模な改修工事があり、本講座の実施においても、会場をホールではなく大研修室とするなどの制約も発生した。新未来とくしま講座のテーマ及び講師等を概観すると、NPOや地元の企業といった県関係以外の組織や団体に着目し、その地域に根差した取組について講演を依頼しているのが特徴である。また、令和5年度はサテライト会場の設置を取りやめ、新たにオンライン配信を開始した。これは、前年度の後半にはサテライト会場の参加者が減少したこと、またオンラインによる会議やイベントがコロナ禍のもと、一般化したことを受けたことによる（表3）。

令和5年度の特徴ある講座としては、次の2講座を挙げる。

1 講座めは、12月10日実施の「大自然に価値をつくる『デザイン思考』の5つのこと～都会から、何が何でも足を運びたくなる場所づくり～」である。徳島県西部の山間部で閉校になった小学校をカフェやゲストハウスとして活用し、地域の拠点となっている取組についての講座であった。行動計画の重点項目との関連では「1. 未来へ雄飛！『笑顔とくしま・県民活躍』の実装①移住交流拡大！深化する地方創生」に位置付けている。

2 講座めは、1月21日実施の「川の清掃活動からはじまる地域づくり～地域をリードする

ボランティア活動～」である。平成2年に有志10人から発足した活動が大きな広がりを見せている。NPOの先駆けとして長く続いてきたその活動実績と、今後を見据えたビジョンについての講座であった。行動計画の重点項目との関連では、「5. 未来へ継承『循環とくしま・持続社会』の実装③自然との共生！『生物多様性とくしま戦略』の展開」に位置付けている。

表3 令和5年度「新未来とくしま講座」テーマおよび講師

実施日	講座テーマ	講師	人数
6/4	100年の森林、100年の産業を創る ～林業遺産「樵木林業」の復興と産業化～	吉田基晴（株式会社四国の右下木の会社 代表取締役）	76
6/24	盲導犬のこと、知っていますか？ ～安心して歩ける社会になるように～	白石佐織（公益財団法人徳島の盲導犬を育てる会 理事）	77
7/16	とくしま「香酸柑橘類」魅力再発見 ～幻の果実ゆこうから描く新しい未来～	堤理恵（徳島大学大学院 医歯薬学研究部 招聘准教授、サントリーグローバルイノベーションセンター研究員）	78 (9)
7/23	家庭から脱炭素！わが家から気候変動を考える ～環境にいい家が健康と家計を守る～	佐藤由美（環境ライター）	74 (8)
7/29	特殊詐欺被害の現状と防止対策について	谷崎晴彦（徳島県警察本部生活安全部生活安全企画課 指導官）	80
8/5	和紙作り50年 ～伝統工芸とアーティストとのコラボ～	藤森洋一（一般財団法人阿波和紙伝統産業会館 理事長） 藤森美恵子（伝統工芸士）	67
10/15	徳島の外来生物 ～来た虫・来る虫・困った虫～	大原賢二（徳島県立佐那河内いきものふれあいの里ネイチャーセンター 施設長）	64
11/23	スマート農業技術の導入効果 ～レンコン栽培における実証事例の紹介～	篠原啓子（徳島県立農林水産総合技術支援センター農産園芸研究課 上席研究員）	56 (5)
12/10	大自然に価値をつくる「デザイン思考」の5つのこと ～都会から、何が何でも足を運びたい場所づくり～	植本修子（株式会社ハレとケデザイン舎 代表取締役）	65 (6)
12/17	150年前の手仕事で鳴門を醸す ～七代目の役目～	井上雅史（井上味噌醤油株式会社 代表取締役）	70
1/14	土柱のみどころガイド ～特に中央構造線との意外な関係について～	中尾賢一（徳島県立博物館 上席学芸員[地学]）	84
1/21	川の清掃活動からはじまる地域づくり ～地域をリードするボランティア活動～	長谷川晋理（認定NPO法人新町川を守る会 理事）	90 (5)

() はオンライン受講の人数（内数）

(4) 令和6年度前期の新未来とくしま講座の実施状況について

令和6年度は、大きな転換期となったと言える。新未来とくしま講座の講師選定の基本となっていた「とくしま行動計画」に代わって新たに、「徳島新未来創生総合計画」が策定されたためである。従来の行動計画があらゆる分野を網羅したものとなっていたのとは異なり、新たな計画は重点的に取り組む項目に絞った構成となっているため、従来とは発想の転換が必要となった。新しい総合計画の下で講座を企画するに当たっては、NPOやボランティア、あるいは企業、さらには一市民として、社会に貢献するという視点を重視している。新未来とくしま講座のテーマおよび講師等を概観すると、マルチステージと言われる人生の中で、一人一人がどのように生きるかを考え、その学びを支援する生涯学習の在り方について考える中で、市民としてどのように地域社会と関わっていくか、そのロールモデルとして、県内で特色ある実践を行っている先駆者に講師を依頼している（表4）。

また、令和6年度前期は、実施した4回のうち3回でオンライン配信を行っている。オンライン配信への認知や理解が進み、社会に広くなじんできている中、新型コロナ対策という面よりも、多様で柔軟な受講機会の提供の色彩が強くなっている。令和6年度においては、申込者に対する電子メールでの事前連絡と受信確認、接続テストによるサポート等、実施体制を拡充

して実施した。

令和6年度前期の特色ある講座としては、次の2講座を挙げる。

1 講座めは、6月22日実施の「サンゴってナニ？なぜまもる～サンゴの生態と『千年サンゴと活きるまちづくり協議会』の活動について～」である。遠洋漁業の船員であった講師が、他に類を見ない「千年サンゴ」の保全活動に取り組んでいる実践について講義を行った。

2 講座めは、7月13日実施の「素敵な未来を創る～シビックプライドのススメ～」である。子供から高齢者までが得意分野で取り組む地域活動について講義を行った。

表4 令和6年度前期「新未来とくしま講座」テーマおよび講師

実施日	講座テーマ	講師	人数
6/22	サンゴってナニ？なぜまもる～サンゴの生態と「千年サンゴと活きるまちづくり協議会」の活動について～	浅香新八郎（千年サンゴと活きるまちづくり協議会 会長）	69 (10)
6/29	にし阿波の観光資源について	日下敏嗣（一般社団法人そらの郷 常務理事兼事務局長）	72 (8)
7/13	素敵な未来を創る～シビックプライドのススメ～	井原まゆみ（NPO法人あわ・みらい創生社 代表理事）	63 (8)
8/3	睡眠負債って？～睡眠のしくみと役割～	勢井宏義（徳島大学大学院医歯薬学研究部生理学分野 教授）	88
8/31	徳島の風流踊（ふりゅうおどり）～阿波踊りもすごいけど他にも踊りがいっぱい～	庄武憲子（徳島県立博物館 民俗担当学芸員）	中止

() はオンライン受講の人数 (内数)

3 新未来とくしま講座の受講状況の分析

ここでは、令和3年度以降について、半期ごとの受講者の推移に着目し、その動向について分析をしたい。なお、令和2年度以前については、令和元年度は15講座、1講座平均約89名の受講者であった。令和2年度は16講座、1講座平均96名の受講者であった。多いときは、120名を超える受講者が集まる講座もあった。

(1) 令和3年度からの半期ごとの受講者数の平均の推移

1 講座あたりの受講者数の平均を、令和3年度より半期ごとに見てみると、令和3年度前期を除き、概ね80名弱で推移している(図2)。

令和3年度後期は、大幅に感染者が増加した新型コロナ第5波以降の時期と重なる。そのため、受講者数が減少したと考えられる。しかし、令和4年度前期以降も、受講者数は増加せず、減少したまま推移している。

新型コロナウイルスが国内で確認されたのが、令和2年1月であり、いわゆるコロナ厳戒期ともいえる令和2年度以降も、受講者数はコロナ発生前までは復調せず、減少したまま緩やかに推移している状況である。その理由として2点推測する。

1 点めは、継続的な受講者の減少である。新未来とくしま講座の前身である平成20年発足の

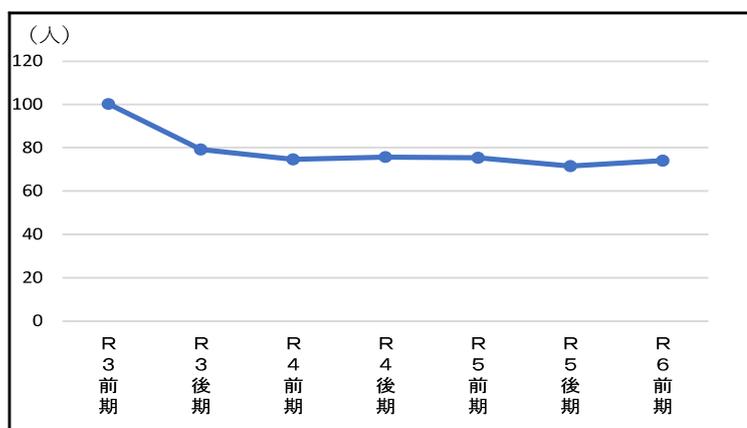


図2 令和3年度からの半期ごとの受講者数の平均の推移

オンリーワンとくしま学講座の時代より、いわゆる団塊の世代が、この講座の受講者層の中心を成しており、現在は、受講者の中心層であるこの世代がさらに年齢を重ねることによって、自然と受講から遠ざかっている状況であると考えられる。

2点めは、新規受講者の減少である。定年延長等により、働き続けるシニア層が増加しており、定年後のセカンドライフにおいて教養を深めるといったニーズが減少しており、結果として新規受講者の獲得につながっていないという状況であると考えられる。

なお、令和3年度前期は、他年度より突出して平均受講者数が多いが、その要因としては、「妖怪伝説」「DMV」「循環型食用コオロギ」といった、新聞等のメディアで取り上げられたテーマが大きく注目を集めたことが考えられる。また、この時期は、いわゆるWithコロナ政策を推進していた時期であり、感染対策を行いつつも社会活動を復調させようという世相のもと、従来からの継続受講者が、久しぶりに参加しようという意欲が高まっていたとも考えられる。しかしながら、その後、秋からの再度の感染拡大をきっかけに、令和3年度後期以降は減少したまま推移している。

(2) 会場参加者の年代別人数割合

令和3年度から令和6年度前期までの全ての講座において、受講者のアンケート回答に基づき会場参加者の年代別人数割合を集計すると、いずれの年度においても、受講者の年齢層は高い(図3)。

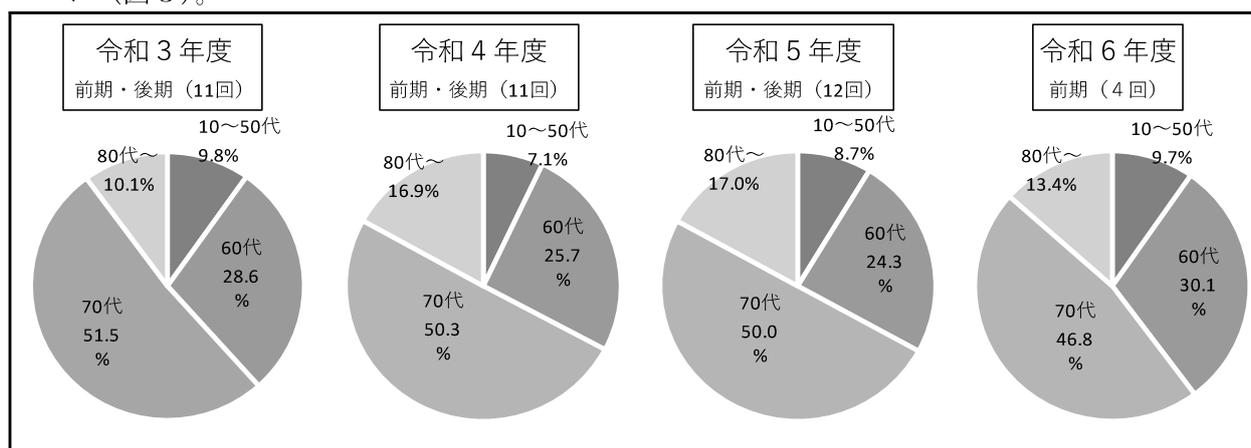


図3 会場参加者の年代別人数割合

60代・70代・80代以上を合わせると、令和3年度は90.2%、令和4年度は92.9%、令和5年度は91.3%、令和6年度は90.3%であり、ほぼ9割を占めている。その中で、70代が最も多い割合を占めており、令和3年度は352名、51.5%、令和4年度は285名、50.3%、令和5年度は300名、50.0%、令和6年度は87名、46.8%である。全体の受講者減により、数は減っているものの一貫しておよそ半数を占めている。2番目に多い割合を占めているのが60代であり、令和3年度は195名、28.6%、令和4年度は146名、25.7%、令和5年度は146名、24.3%、令和6年度は56名、30.1%である。80代以上は3番目に多い割合を占めており、令和3年度は69名、10.1%、令和4年度は96名、16.9%、令和5年度は102名、17.0%、令和6年度は25名、13.4%である。このように、60代の割合が減少し、80代以上の割合が増加しているのは、継続的受講者が高齢化していることと、60代以下の新規受講者の開拓が進んでいないためであると考えられる。

(3) 分野別の受講者数の推移

新未来とくしま講座では、「文化」「自然」「くらし」の3分野に各講座の内容・特色を設定している。「文化」分野には、歴史や民俗、芸術関連の講座が、「自然」分野には、自然科学分野や農林水産業関連の講座が位置付けられるが、共に地域に密着した内容や、徳島の新たな魅力を発見しようという内容も含んだものになる。「くらし」分野は、時事的に話題となっていたり注目を集めていたりしている社会的な内容から、生活や個人に密着したような内容まで多岐にわたっている。

令和3年度から令和6年度前期までの講座数は「文化」分野が8講座、「自然」分野が11講座、「くらし」分野が19講座となっている。分野別の受講者数の推移をみると(図4)、「文化」及び「自然」分野については、一定の受講者数を維持しながらも、徐々に右下がりという傾向を示している。これは全体の受講者数の減少と同傾向である。過去から継続的に受講している層が、高齢へとシフトしており、それに伴い受講者が自然と減少しているのが原因と考えられる。「くらし」分野については、講座ごとに受講者数の大幅な変動が見られる。テーマが多岐にわたっている分、受講者の興味・関心の程度がそのまま受講者数とつながっていると考えられる。このため「くらし」分野では、テーマの設定次第で多くの受講者が集まる可能性がある。講座を主催する立場として、そのときの社会情勢・世論を踏まえ、受講者のニーズに合致するテーマを設定することが、今後より一層重要になってくると考える。

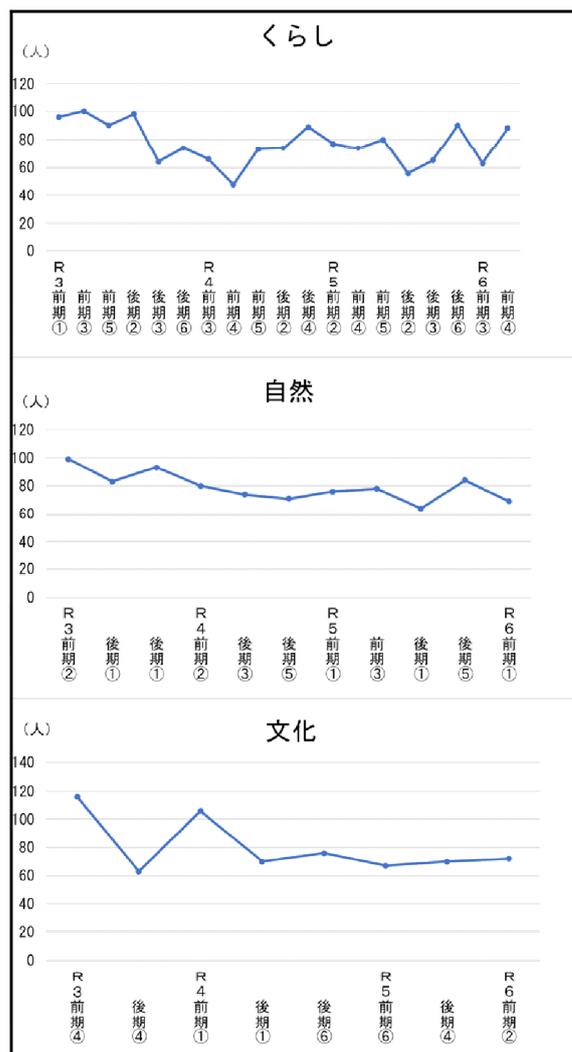


図4 分野ごとの受講者数の推移

4 講座の内容についての満足度

令和3年度から令和6年度前期までの講座の内容についての満足度を、参加者へのアンケート調査の結果をもとに年度ごとに集計した(図5)。いずれの年度においても、「満足」、「やや満足」を合わせた肯定的な回答が95%以上となっており、新未来とくしま講座全体としては、講座の満足度について一定の水準を確保している様子がうかがえる。肯定的な回答の理由としては「まだまだ知らないことをもっと知りたい。」「地元の徳島を再発見できる。」「いろいろな人の話を聞きたい。」などの記述があり、主として講座を受講することで新たな知識を得られたことに対する感想が多い。これは、今回調査した全ての年度について同様の傾向となっている。

全体的な受講者数は減少傾向にあるが、否定的な回答にその原因となる要素があるかどうか各年度について、特に否定的回答の多かった講座について、記述内容を分析した。

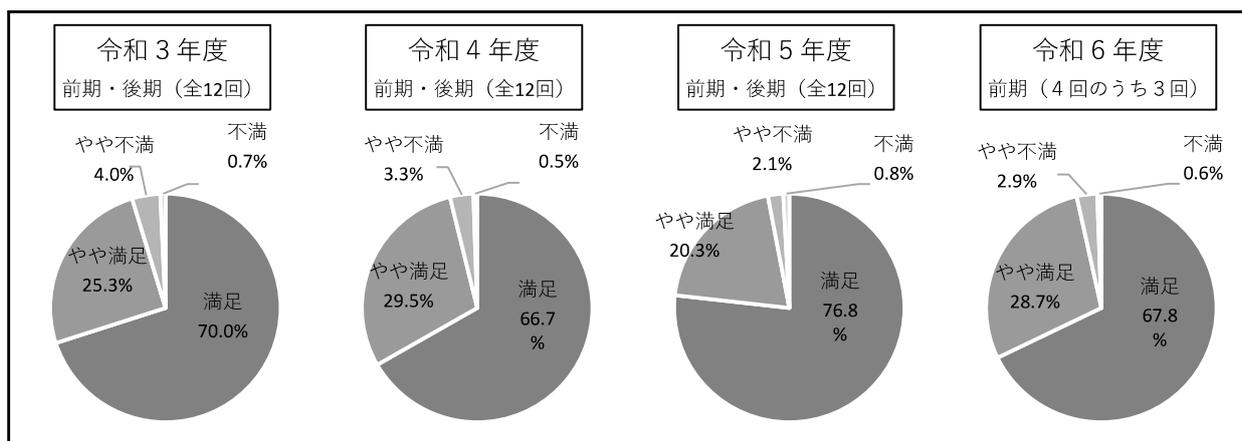


図5 講座の内容についての満足度

令和3年度は12回の講座のうち、やや不満・不満が5%を超えた講座が5回あり、その理由としては、「講座の時間超過は、有意義な話が薄れる。」「講師の説明がピンとこない。重要なことなのに残念。」「話の内容が分かりにくかった。」「ゆっくり話してほしい。」「資料の字が小さすぎて読めない。前の画面でも小さすぎる。」「話し方が速い。」「声が小さい。」などの記述があった。令和4年度は、11回の講座のうち、やや不満・不満が5%を超えた講座が4回あり、「音量が小さくて最初聞き取りにくかった。」「話が聞き取りにくかった。」という記述があった。令和5年度は、全12回の講座のうち、やや不満・不満が5%を超えた講座が1回あり、「話が聞き取りにくい。」「難しいのでよく分からなかった。」という記述があった。令和6年度は前期4回のうち、やや不満・不満が5%を超えた講座が1回あり、講座の時間が短かったことや、内容の重複や資料と説明とがかみあっていない部分への指摘であった。

否定的な回答は全体としては、難易度や講師の音量、話す速さに起因するものが多く、テーマの設定や講座の趣旨、講師の考え方に対するものではなかった。このことから、講座内容が受講者数減少に直接影響している可能性は低いと考えられる。

5 オンライン配信について

(1) サテライト会場について

新未来とくしま講座では、令和元年度より、実施講座のいくつかで、徳島県西部・南部にサテライト会場を設置して、遠隔地の受講者への対応の措置をとっていた(表5)。その後、新型コロナ禍における3密対策として、令和4年度まで、サテライト会場の設置が続いた。

表5 新未来とくしま講座サテライト会場の状況

年度	実施回数	平均参加者数
令和元年度	15講座のうち4講座で開設	14.0
令和2年度	16講座のうち2講座で開設	6.5
令和3年度	11講座のうち7講座で開設	8.0
令和4年度	11講座のうち6講座で開設	2.3
令和5年度	オンライン配信へ移行	—

(2) 受講者数

オンライン申込数・受講者数は、令和6年度にやや増加が見られる(図6)。後期については、令和6年11月末時点での数である。第5回の講座は、令和7年1月18日に「心が軽くなりやる気が湧いてくる『お片付け』の話～ライフオーガナイズ『思考の整理術』を学ぶ～」であ

る。現段階で突出した申込があり、新たな受講者層の開拓が期待できる。

(3) オンライン受講者の年代別割合

オンライン受講者の年代別割合を集計すると、令和5年度と令和6年度では、顕著な違いが見られた(図7)。令和5年度は、12回の実施のうち、オンライン配信は5回であった。参加者延べ人数は33名、うちアンケート回答者は延べ14名であった。70代が最も多く、次いで60代という年齢構成は、会場参加と同様である。オンライン配信を開始した初年度となった令和5年度では、従来の会場参加者でオンラインに移行した参加者が存在した。受講後のアンケートでは、会場までの往復の時間短縮であったり、自動車の運転の不安、免許の返納等の事情により、会場での参加が不便であったり困難であったりすることについての記述があった。

令和6年度前期は4回の実施のうちオンライン配信は3回であった。参加者延べ人数は26名、うちアンケート回答者は延べ10名であった。令和6年度前期の特徴は、30代、40代の受講者が加わったことである。従来では、ライフサイクルの中で、仕事や家庭における役割が大きく、受講に消極的であった層の受講が可能となったと考えられ、オンライン配信が新規受講者の開拓に有効であると考えられる。

(4) オンライン受講者の講座満足度

オンライン参加者の講座内容への満足度について、アンケート調査の結果をまとめたところ、令和5年度・令和6年度ともに、「満足」、「やや満足」を合わせた肯定的な回答が100%を占めており、会場参加者との顕著な違いは見られなかった(図8)。また、自由記述の内容には「貴重な写真や動画を交えた講座であった。」

「独自の発想と行動力から、現在進行形で取り組まれているのが素晴らしいと思いました。」とあり、受講しなければ見ることができない資料や、講師の口から直接語られる具体的な内容について知る機会となったことへの満足度が高いことが見て取れた。

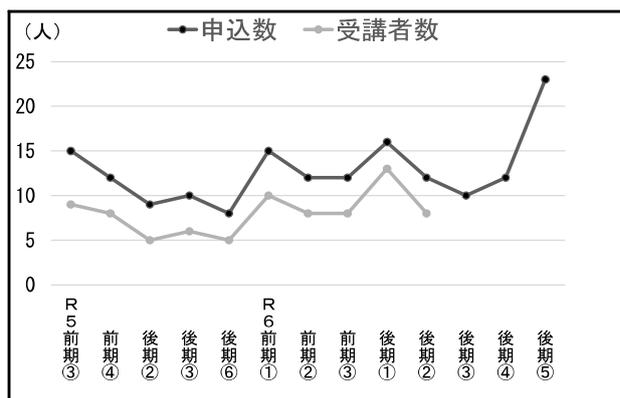


図6 オンライン申込数・受講者数の推移

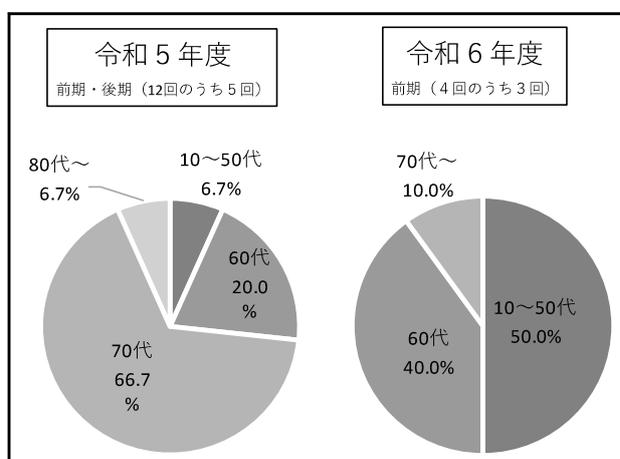


図7 オンライン受講者の年代別割合

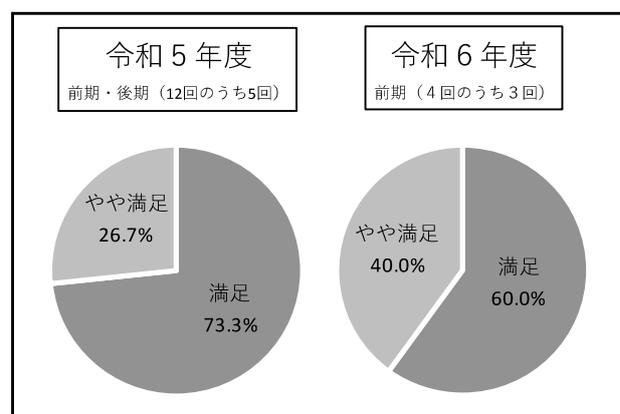


図8 オンライン受講者の講座満足度

IV 研究の成果と今後の課題

1 本研究における成果

- (1) これまでの新未来とくしま講座の方向性は、個人の自己実現を支援する要素だけでなく、地域活性化、社会貢献などの要素を含むものであり、第4期教育振興基本計画において示された「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」にも矛盾するものではないことが分かった。
- (2) 新未来とくしま講座における受講者の満足度は高く、講座内容は一定の水準を確保していることが分かった。これは、各講座のテーマを県の行動計画に位置付け、県の施策の一環として実施する中で、自ずとその時の世相や社会的ニーズを反映したものとなっていたためであると考えられる。
- (3) オンライン配信を中心としたデジタル社会への対応は、これまでの受講者の継続的受講の支援につながるだけでなく、新規受講者の開拓にも効果があり、積極的に推進していくべきものであることが分かった。

2 本研究における今後の課題

- (1) 受講者の中心層が70代であり、より高齢にシフトしていく中、受講者が徐々に減少するのは免れない。新規の受講者の獲得に向け、幅広い世代を取り込むための効果的な広報活動について、さらなる検討の余地がある。
- (2) オンライン受講者について、事前の接続テストの充実やオンライン受講時のフォローなど、デジタル機器に不慣れな受講者の手当てを行うことの必然性が明らかになった。利便性が高い分、継続的にオンラインで参加してくれる受講者の輪を広げることが重要だと分かった。

V おわりに

本研究を通じて、徳島県立総合大学校主催「新未来とくしま講座」が、徳島の文化・自然・暮らしといった身近なテーマを扱いつつも、県民一人一人のウェルビーイングの実現をめざし、生涯にわたって学び続ける教育環境づくりを担う重要なものであるとの認識を新たにすることができた。最後に、本講座実施において、多大なる尽力を頂きました講座講師の皆様方に深く感謝の意を表します。

参考文献

- ・内閣府「第4期教育振興基本計画」、令和5年6月16日
- ・文部科学省「第12期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」、令和6年6月